



日本学士院ニュースレター

2016. 10 No. 18



第 64 回公開講演会で講師を務める大村 智会員

平成 28 年 5 月 21 日、東広島市の近畿大学広島キャンパスにおいて第 64 回公開講演会を開催し、東野治之会員と大村 智会員が講演しました。(関連記事 5 ページ)

目次

第 106 回日本学士院賞授賞式	2	『学問の山なみ』から 一歴史をつくった会員― ..	10
事業紹介(国際学士院連合での協同研究活動)	5	第 9 回学びのススメシリーズ講演会のお知らせ .	11
第 64 回公開講演会レポート	5	第 65 回公開講演会のお知らせ	11
会員寄稿 (芦阪直行会員)	6	会員・客員の逝去	12
第 11 回日韓学術フォーラム	7	会員の近刊紹介	12
学士院の歩み	8	編集後記	12
日露関係史料をめぐる国際研究集会の 実施について	9		

第 106 回日本学士院賞授賞式

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、平成 28 年 6 月 27 日（月）に第 106 回授賞式を本院会館（東京・上野公園）で挙行了しました。本年は、恩賜賞・日本学士院賞 1 件 1 名、日本学士院賞 8 件 8 名、日本学士院エジンバラ公賞 1 件 1 名の計 10 件 10 名の方々に授賞を行いました。（所属は受賞当時）



杉村 隆院長から賞状・賞牌を授与される森 和俊受賞者



受賞者と文部科学大臣、日本学士院役員



授賞式で祝辞を述べる馳 浩文部科学大臣（当時）

恩賜賞・日本学士院賞

「小胞体ストレス応答の発見と解明」

森 和俊（京都大学大学院理学研究科教授）

日本学士院賞

『満洲語辞典』

河内 良弘（京都大学名誉教授、天理大学名誉教授）

『戦後日本公害史論』

宮本 憲一（大阪市立大学名誉教授、滋賀大学名誉教授）

「MAP キナーゼ並びに関連シグナル伝達経路の分子機構と機能の解明」

西田 栄介（京都大学大学院生命科学研究科教授）

「113 番超重元素の発見」

森田 浩介（九州大学大学院理学研究院教授、理化学研究所仁科加速器研究センター 超重元素研究グループ・グループディレクター）

「感覚と知能を持つロボットの基盤技術の開拓」

井上 博允（東京大学名誉教授）

「多孔性金属錯体材料の創製と応用に関する研究」

北川 進（京都大学物質－細胞統合システム拠点長・教授、京都大学大学院工学研究科教授）

「インフルエンザウイルスの病原性の分子基盤解明とその制圧のための研究」

河岡 義裕（東京大学医科学研究所教授、米国ウイスコンシン大学獣医学部教授、東京大学医科学研究所感染症国際研究センター長、京都大学客員教授）

「シナプス分子と記憶・学習に関する研究」

三品 昌美（立命館大学総合科学技術研究機構教授、東京大学名誉教授）

日本学士院エジンバラ公賞

「植物ホルモン・ジベレリンがもたらす種の保全確保と植物多様性ならびに食糧生産性向上に関する研究」

松岡 信（名古屋大学生物機能開発利用研究センター教授）

＜受賞者寄稿＞

「小胞体ストレス応答の発見と解明」

京都大学大学院理学研究科教授 森 和俊

「小胞体ストレス応答」はまだ一般にはなじみのない言葉ですが、「タンパク質の品質を管理する細胞応答」と言い換えることができます。

生き物の基本単位は細胞です。私達人間は60兆個もの細胞でできています。細胞の中はどうなっているのでしょうか。私達の体の中には、いろんな臓器が入っていて、肺が呼吸をし、心臓が血液を循環させています。同じように、細胞の中にも小さな臓器（細胞内小器官）がたくさん入っていて、それぞれが役割を分担しています。私が研究している「小胞体」は細胞内小器官の一つで、タンパク質の製造工場という役割を果たしています。

タンパク質とは何でしょう。一般には、炭水化物、脂肪と合わせて3大栄養素の一つですが、細胞の中では水の次に多量に存在する重要物質です。タンパク質が働いているから我々は生きているといっても過言ではありません。さらに、工場で行われているような品質管理がタンパク質にとっても重要なのです。

糖尿病を例に解説しましょう。尿中の糖濃度が高いことが原因で病気になるのではなく、血液中の糖濃度（血糖値）が高い状態が続くと、糖が尿に漏れだすと同時に血管にダメージを与えて、いろいろな症状が出ます。

しかし、食事後には誰でも血糖値が上がります。でもしばらくすると血糖値が下がるのは、膵臓が作っているインスリンというタンパク質が血液中に放出されるからです。このタンパク質（鍵）が肝臓や筋肉の細胞に存在するインスリン受容体というタンパク質（鍵穴）に入っ

て鍵穴を回すと、まるで車のエンジンがかかったかのように、肝臓や筋肉の細胞が血液中から糖を取り込むために、血糖値が下がるのです。

鍵と鍵穴は1対1で対応するようにそれぞれの形が決まっています。ですから、タンパク質が働く時にはその形が重要です。タンパク質の原料はアミノ酸が数珠つなぎりで並んだ紐（ひも）です。つまり、この紐を針金細工で、鍵や鍵穴の形に作り上げているのです。この針金細工を細胞内でしているのが、小胞体という工場です。この工場はかなり優秀で、タンパク質の品質（形）をよく管理しているのですが、それでも時にうまく機能しなくなり、不良品のタンパク質がいつも以上にできてしまうことがあります。この状態を小胞体ストレスと呼んでいます。このとき、この悪くなった状況を元に戻そうとする仕組み（復元力）が細胞に備わっていることを、1988年に米国テキサス大学のゲッシング博士とサンプルック博士が発見しました。

1989年に彼らの研究室の博士研究員となった私は、以来（1993年の帰国後も）、この応答（細胞が示す反応のこと）の分子機構（メカニズム）を解明し、その重要性を明らかにしてきました。小胞体ストレス応答は、個体の正常な発生・成長に重要であるだけでなく、様々な病気の発症や進展にも関与していることがわかりましたので、疾患克服を視野に入れ、小胞体ストレス応答の本質解明に向かって今後も研究に邁進します。



両陛下に研究内容をご説明する森 和俊受賞者



会員や来賓と談笑する森 和俊受賞者

＜受賞者寄稿＞

「満洲族国家の創成と文字」

京都大学名誉教授 河内 良弘

一つの民族国家が創成されるためには、その集団は少なくとも

1. ある程度の経済的蓄積のあること。
2. 軍事力のあること。
3. 軍隊の動員、命令の正確な伝達、兵員・食料の備蓄状況、外交などの記録に便利な文字を備えていることなどが必要である。しかし満洲族は開国の17年前、1599年まで、自国語を記録する便利な文字を持たなかった。

女真文字と称されるものは当時にもあった。金王国時代(1115~1234)の1119年に制定された女真文字がそれである。ところがこの文字は基本的には表意文字であって、文字の音を知らなければ読めず書けず、日常生活の用には使い勝手の悪い不便な文字だった。

明国の時代になると、祖国を失った女真人には統一政権はまだ生まれず、東北地方各地に分散して居住していた。その女真各村落に、明国は「何某衛」という明国兵制上の名称を与え、あたかも女真人が明国の臣下であり、彼等が明国の軍事的支配下に隷属するかのような体裁をとった。この頃の女真人は女真語は話したが、女真文字も漢文も読めなくなっていた。

明の正統9年(1409)、玄城衛をはじめとする40村落の女真人が、「臣等には女真字を知る者なし。今後勅文のたぐいは蒙古字を用いていただきたい」と上奏して裁可されている。実はこれより2年前の正統7年、建州衛という女真最大級の村落でも女真文勅書に難渋し、女真人書記を雇うという問題を起こしている。結局明国から女真への

文書は、蒙古文か漢文で送ることにしたらしい。しかしこの頃の女真人は女真文はおろか漢文も読めなかった。彼等が読み書きできたのはモンゴル文だけだった。

清朝の太祖ヌルハチはモンゴルとの商取引の必要上、モンゴル語やモンゴル文字に堪能であった。その頃の女真人はモンゴル文字は知ってはいたから、モンゴル文字を使い、モンゴル語で必要なことを記録していた。しかしヌルハチはモンゴル文字は表音文字だから、モンゴル文字で直接満洲語を書く方法を考え出した。彼の考え出した新しい満洲文字の書写法は、人々に支持され爆発的なひろがりを見せた。中央の司令部と前線との連絡は飛躍的に便利になった。戦闘詳報も、財政状況も、木札か竹札か紙と筆さえあれば、すぐに中央政府から前線へ、前線から中央政府へ、正確、迅速に伝わるようになった。満洲文字は情報の伝達に恐るべき力を発揮しはじめ、国家の創成に計り知れない寄与をおさめた。ヌルハチによる満洲文字の書写法の発明なくしては、清国の創成はなかったであろう。

現在、北京の第一歴史档案馆、台湾の故宫博物院、その他地方の古文書館に収蔵されている満文古文書は約200万件以上、黒竜江省档案馆収蔵のものだけでも60トン以上といわれ、これらの満文古文書の読解なしには、清朝及び周辺諸国の歴史は語れない。このたび『満洲語辞典』は、本田道夫教授の技術協力を得て完成し、はからずも日本学士院賞受賞の光栄を得た。この辞典が世にうずもれた貴重な満文資料の発掘と読解のための一助となることを、編者ならびに技術協力者は切に希望している。



研究資料展示。中央の掛け軸の文字が「女真文字」。右の掛け軸にある文字が「満洲文字」



会員と挨拶を交わす河内良弘受賞者

事業紹介（国際学士院連合での協同研究活動）

国際学士院連合（Union Académique Internationale）は、人文学・社会科学分野の学術の国際協同事業を促進することを目的とした組織で、各国の学士院（アカデミー）等が加入しています。日本学士院は、大正8（1919）年以来、同連合に加入し、日本学士院法にもその旨規定があります。日本学士院の代表は青柳正規会員と佐藤彰一会員が務めており、青柳会員は同連合の副会長に選ばれています。

同連合では現在までに80を超える研究事業が採択されて助成や後援が行われています。本院が関係する主な事業としては、「古典古代甕瓶集成」、「在外未刊行日本関係史料」（本号8ページ掲載の「学士院の歩み」もご覧ください）、「太平洋地域言語地図」などがあります。これらの事業は、世界各国に分散収蔵されている歴史資料や美術品等を関係分野の研究者が国境を越えて調査・

研究を進めるものです。たとえば前記「古典古代甕瓶集成」の事業は日本を含む世界各地に散在する古代ギリシャ・ローマの壺類の所在を調査するもので、現在までに400冊の目録が出版されています。

国際学士院連合総会は2年に1回開催され、新しい事業の採択や事業の進捗状況の確認などを行っています。来年（2017年）は、同連合の創設以来初めて、日本での総会が開催される予定です。



平成27（2015）年にベルギー・ブリュッセルで開催された総会

第64回公開講演会レポート

平成28年5月21日（土）に近畿大学との共催により、第64回公開講演会を東広島市の近畿大学広島キャンパスメディアセンター・マルチメディア講義室において開催しました。今回は、東野治之会員（奈良大学文学部教授、東京国立博物館客員研究員）が「『日本』という国号」、大村 智会員（北里大学特別荣誉教授、北里大学北里生命科学研究所スペシャルコーディネーター）が「人類の健康と福祉を支える微生物の働き」と題して講演を行いました。

東野会員は日本という国号が定まったいきさつや、その伝わり方を様々な史料に言及しながらたどり、日本の

歴史や国際交流の特色を説明しました。また大村会員は自身が発見した微生物代謝産物（天然有機化合物）を中心に優れた微生物の物質生産能が人類の健康と福祉に役立っている様子を、自身のエピソードも盛り込みながら、写真や図絵を示しつつ、分かりやすく説明を行い、聴講者は熱心に聞き入りました。講演終了後は活発な質疑応答がなされました。聴講者からは「日本の国号のルーツに迫る話は、日本人のルーツを知る上で有益だと思った。」「微生物がすごく可能性のある対象で、研究のしがいのある分野ということがわかったのでよかった。」等の感想が寄せられました。



講演を行う東野治之会員



講演を行う大村 智会員

(会員寄稿)

心理学—哲史文と理系の交差点

亭阪直行 会員
(認知心理学・認知科学専攻)

文系と理系の重なり合う学際領域で仕事をしてきた一学徒の私感を述べてみたい。

銀河系には一千億以上もの星があるといわれるが、ハッブル宇宙望遠鏡でその動きが観察できるという。では、脳の中の宇宙はどうであろうか？脳内宇宙にもやはり一千億ほどのニューロン（神経細胞）がありそれらが網の目のように相互接続され、そのゆらぎが社会的な意識を生んでいるという。星の動きの観察によって、その性質がわかるように、ニューロンのネットワークのゆらぎの観察によって脳の働きの一部が、したがってそれと関連した心の性質がわかるようになってきた。

脳の宇宙の観察にはハッブル宇宙望遠鏡の代わりに機能的磁気共鳴画像法 (fMRI) などを使う。人間の脳ネットワークにはさまざまな経験や情報が集積され、そこに深々と根を下ろして文化や芸術などが生まれたといえる。文系の仕事は亭々とそびえたつ文化や芸術という大樹を観察することだろう。一方、大樹の地下に広がる脳のネットワークを観察するのは先端脳科学や情報学などの理系の仕事とされてきた。実際、米国ではコネクトームと呼ばれる全脳のニューロンネットワークを明らかにする国家的プロジェクトが進行中であり、今まで不可能と思われてきた文化、芸術や信念を脳科学や人工知能を含む情報学から再検討する道が開かれつつある。

さて、文系の豊かな畑を理系のクワで耕してみたい筆者の興味は、まさに文系と理系の出会うこの交差点にある。ここで fMRI というクワを使って、他者と共に感じること（共感）、あるいは健全な社会性を生みだす社会脳 (social brain) の脳内基盤を探るのである。最近、筆者は多くの協力者を得て社会脳シリーズ全9巻で文理融合の冒険的試みを行ったが、以下では、心理学の生い立ちとその基本概念の一つである「注意」をめぐる面白い文理融合実験の一例を紹介したい。

明治初期の学士院会員であった西周は西洋の心理学に関する学術語を初めて和製に翻訳した。例えば「注意」、「心理学」や「意識」などは今日も使われている。明治初期の創設時（1870年）の（東京帝国）大学の教授科目リストには、教科、法科、理科、医科および文科の5科の開設がみえるが、このうち、文科に性理学（哲学）、

昭和21年、京都生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。追手門学院大学助教授、京都大学大学院文学研究科教授・文学部長・文学研究科長を経て京都大学名誉教授、大阪大学脳情報通信融合研究センター招聘教授。日本学術会議会員・「脳と意識分科会」委員長・近畿地区会議代表幹事を歴任。平成24年より、日本学士院会員。日本人間工学会橋本賞、日本心理学会国際賞等を受賞。



紀伝学（歴史）、文章学（文学）の3科が置かれ、これが後に人文学の中核をなす「哲史文」の嚆矢となったといわれる。このうち性理学が西の psychology の訳語であるという説がある。一方では、彼が当時、ジョセフ・ヘブンの著書 *Mental philosophy including intellect, sensibilities and will* を訳して上梓するときに、そのタイトルを「心理学」としているの、哲学上の心理面 (mental philosophy) を扱う学を「心理学」と名づけたのが事実らしい。

19世紀末、西洋では自然科学の勃興期にあたり、意識を科学的な機器を用いて実験的に調べる新たな機運が醸成されていた。本邦でも、1903年に帝国大学文科大学に心理学実験場が創設され、ようやく心理学が「哲学の揺りかご」から独立した。しかし、制度上、心理学は哲学科の一部を占めるとみなされ、「哲史文」の伝統的な枠組みの中にとどまり、所属は文学部という時代が長らく続くことになる。実験を用いて「意識」やそれを担う「注意」など、心を探求する実験心理学は、文学部の伝統的枠組みの中にあって異端の存在であり、文系と理系のはざままで揺れ動いてきた。しかし、近年の脳科学の社会事象への新たな展開に伴って、「哲史文」の中で培われた心理学の価値が見直されようとしているのは幸いなことである。

さて、「注意」はかつて、西周がつくった attention の訳語であるが、現在、社会脳の主な研究テーマはまさに「注意」なのである。ここで「注意」にまつわる面白い実験を紹介したい。



Bateson, Nettle & Roberts (2006) *Biology Letters* 2, 412-414

英国のニューキャッスル大学で行われたコーヒークラブでの“正直箱”の実験は、次のようなものである。休

憩室にはセルフサービスの、コーヒーや紅茶のセットが置かれており、一杯 50 ペニーを入れてくださいと書かれた注意書（「花の写真」つきの）が貼られ、その下にお金を入れる箱が置かれていた。しかし、誰もいない部屋なので正直に 50 ペニー入れる人は少ない。ところが、図のような「花の写真」を「視線の写真」と取り替えておいたところ投入金額は 3 倍に増えたという。いずれの写真であっても、それが特に注意されることはなかったことから、「視線の写真」は本人も気づかぬうちにその行動に影響を与えたことがわかった。

では、なぜ増えたのか？その理由として、他者の視線は本人に気づかれることなく、無意識な注意を介して道徳的良心をくすぐるというのがある。この解釈は、一昔前なら、笑い飛ばされていただろうが、面白いことに、脳の側頭葉には視線を検出するユニークな視線検出の社会脳領域があることが最近わかってきた。そして、他者の視線の情報は頭頂葉後部で無意識に働く注意によって前頭葉の良心や道徳とかかわる社会脳のネットワークに

伝わっている可能性もでてきた。自分で気づかぬうちに、視線写真の影響で 50 ペニーを正直に払ってしまうのは、他者の監視的な視線のせいであって、道徳的良心とは関係がないと考える立場もある。心理学では周囲の刺激が注意を介して行動に影響を及ぼす効果をプライミング効果と呼んでいる。行動経済学者であり心理学者であるカーネマンによれば、これは注意のモニタシステムの無意識な働きによるという。

道徳や良心がどう脳内に表現されるかという問題は、これまでの脳科学では問題にもされていなかった「設定不良問題」であったが、近年の融合社会脳の研究はその可能性を探るところまでできている。西周の創った「注意」の研究は、一半世紀を経た今日、心理学を含む「哲史文」を中心として、法学、経済学を含む社会科学系を軸に理系を巻き込んで、新しい融合社会脳の領域の構築に向けて歩みを進めは始めている。今まさに「哲史文」で培われた知識と教育が役に立つ時代が来ているように思われるのである。

第 11 回日韓学術フォーラム

大韓民国学術院との共同事業として始まった日韓学術フォーラムは、第 11 回を迎え、平成 28 年 9 月 28 日（水）～9 月 30 日（金）の 3 日間、東京で開催されました。フォーラムには大韓民国学術院から権肅一会長を始め 12 名の会員が来日し、本院会員及び報告に関わる分野の研究者等を合わせて約 50 名の参加がありました。

大韓民国学術院会員等は来日後、まず学士院を訪問、学士院役員等と和やかに歓談し、旧交を温め、続いて東京国立博物館を訪問しました。翌 9 月 29 日（木）には、学士会館（神田）を会場として、4 名の会員から次のように報告があり、その後、日韓両国学士院会員等の間で意見交換が行われました。

報告 1：斎藤 修会員（日本学士院会員、経済史・歴史人口学）

「人口転換の日韓比較」

報告 2：柳壯熙（YOO, Jang-Hee）会員（大韓民国学術院会員、経済学）

「新しい資本主義市場秩序に関する模索：韓国の場合」

報告 3：吉川弘之会員（日本学士院会員、精密工学・一般設計学）

「イノベーションを志向した工学教育」

報告 4：韓松曄（HAHN, Song Yop）会員（大韓民国学術院会員、電気工学）

「韓国における超電導応用の研究と展望」

最終日の 9 月 30 日（金）には、大韓民国学術院会員等は、日本科学未来館を訪問しました。



フォーラム参加者の記念撮影



フォーラム参加報告者の自由討議

日本学士院は、明治6（1873）年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12（1879）年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39（1906）年に帝国学士院に改組し、昭和31（1956）年に現在の日本学士院となりました。このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介します。

日本と西欧との出会いは16世紀に遡る。これ以降、西欧諸国と交渉が持たれた結果、今日、これらの国には日本に関する多くの古文書・古記録が保存されている。こうした史料の収集は、歴史学を始めとする関係諸学間にとって研究を進める上で重要なものである。

大正8（1919）年10月、帝国学士院は国際学士院連合に加入し、以後毎年開催される総会に代表を派遣した。大正10（1921）年にベルギー・ブリュッセルで開催された第2回総会に派遣された三上参次会員（帝国大学文科大学史料編纂掛事務主任〔現在の東京大学史料編纂所長〕を務めた）は、総会最終日に、次のような提案を行った。すなわち、東京帝国大学においてヨーロッパ諸国に散在する日本に関する史料の収集を一部行ってきたが、いまだ多数漏れがあると思われるので、通知に預かりたい。さらに関係諸国において、史料の相互交換に賛成されるならば、次回具体案を提出するという提案で、これは満場一致で賛成された。

三上会員は帰国後、帝国学士院総会で提案について報告を行うとともに、関係各国は委員を選出すること、新たに発見した史料を通報し謄写（写本を作成）する際の費用は供給を受けた側が実費を支払うこと等を記した案を作成した。

大正11（1922）年に開催された第3回国際学士院連合総会に出席した井上哲次郎、織田萬、美濃部達吉の3会員は、三上会員の案を提出し、全会一致で承認された。委員は、日本の他、イギリス、フランス、イタリア、オランダ、スペインから選出され、さらに、各国の専門学者に委嘱して、史料の指示または集中調査について帝国学士院との連絡交渉に当たらせることとした。

翌年、帝国学士院は、ヨーロッパで史料調査の実績がある村上直次郎博士（当時、東京音楽学校長）に本事業の調査事務を嘱託した。また、同年よりハーグの古文書館所在の関係史料の謄写に着手することとなり、三上会員が古文書館長に協力を依頼したほか、穂積陳重帝国学士院長から在オランダ代理公使に本事業の援助を依頼し、第1回の謄写費450円を送金した。

最初の謄写事業は、元和9（1623）年から寛永9（1632）年にいたるオランダ東インド会社経営の平戸商館文書であり、同年秋に謄写が終了した。以降、オランダにおける調査は毎年続けられた。

また、フランス、イタリア、スペイン、アメリカ、イギリス等に所在する史料の情報収集と調査連絡にも努力したが、史料は膨大であり、予算が少額であることもあり、まずはオランダの史料収集に集中することにした。

毎年の国際学士院連合総会の折には、各事業を推進するための委員会が開催された。本事業についても、委員会で事業の進捗を図った。例えば、文書の交換機関を新設する要望が出され、在ベルギー日本大使館において文書の連絡の便宜を図ったり、史料を秘匿する古文書館に仲介の段取りを付けるなどした。本事業は、7番目の事業であるため、本委員会はいつしか第7委員会と呼ばれるようになった。委員会は、昭和5（1930）年に、申し出がある際は開会することを条件に休会となったが、事業自体は、続けられた。しかし、昭和14（1939）年の第二次世界大戦の勃発により、同連合の活動も停止し、本事業も中止となった。この間に謄写収集された文書は製本され、185冊にのぼる。

終戦後、帝国学士院は日本学士院に改組され、昭和27（1952）年、活動を再開していた国際学士院連合に復帰を認められた。代表を務めた宮澤俊義会員は、第7委員会において同事業の再開を希望し、直ちに採択された。その後、第7委員会の要請により、日本学士院に連絡機関として、辻善之助会員を委員長とする在外史料情報交換連絡委員会が設けられた。同委員会は、本事業を東京大学史料編纂所に委嘱することとし、昭和29（1954）年に、山田三良院長から矢内原忠雄東京大学総長宛に委嘱状を送り、了承された。

委嘱を受けた史料編纂所は、マイクロフィルム撮影による複本作成を行うこととし、昭和29年度を初年度とする5ヶ年事業として、オランダ所在「蘭館日誌」を手始めに、順次、オランダ、イギリス、ポルトガル、イタリア、パチカン、アメリカと進めて行くこととした。

当初の5ヶ年計画の後も、事業は続けられ、その間、国費の他、国際学士院連合、ユネスコ哲学人文科学協議会、オランダ政府等から補助金が交付された。収集されたマイクロフィルムは、19か国61機関から2千巻114万コマにのぼり、目録15冊が刊行された。

本事業は現在も東京大学史料編纂所において続けられ、『日本関係海外史料』を現在までに44冊出版した他、旧ソビエト連邦時代は調査できなかったロシア所在の史料の収集やデジタル化等を行っている。

日露関係史料をめぐる国際研究集会の実施について

平成 28 年 5 月 24 日（火）、国際学士院連合関連プロジェクト「在外未刊行日本関係史料調査事業」の一環として、東京大学史料編纂所（山家浩樹所長）と共催による「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催しました。

東京大学史料編纂所では、日本学士院の委嘱をうけたプロジェクトとして、ロシアに所在する日本関係史料の系統的な調査・研究と収集にも取り組み、現地の研究機関と協力して国際研究集会や共同研究を継続しています。今回の研究集会は通算 16 回目、ロシアの旧都サンクトペテルブルクから 3 名の研究者を招へいしてロシアの文書館が所蔵する史料群に基づいた報告をお願いしました。当日は 3 本の報告が行われ、参加者は、北海道・新潟・京都・大阪を含む全国からの専門研究者ら約 60 名でした。学士院からは斯波義信会員が参加しました。

研究集会では東京大学史料編纂所の山家所長が挨拶に立ち、この前日、ロシア国立海軍文書館との研究交流覚書に調印し、共同研究の継続が図られることになったこと、また、ロシア国立歴史文書館の前館長アレクサンドル・ソコロフ教授（サンクトペテルブルク国立大学）が日本学士院・史料編纂所との長年の研究交流を評価され、春の叙勲で旭日中綬章となったことを報告し、祝意を表

しました。

次に、第 1 報告では、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所ワジム・クリモフ上級研究員から「1862 年日本使節団が見たサンクトペテルブルクのイズレル興行施設と漕艇競技大会」と題した報告が行われ、文久遣欧使節団の異文化交流のありさまが、現地のさまざまな雑誌や新聞記事を用いて生き活きと紹介されました。

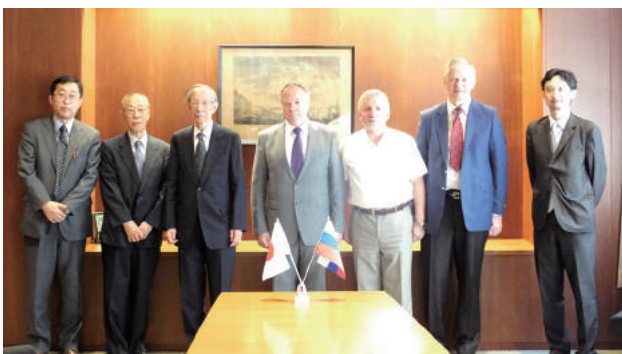
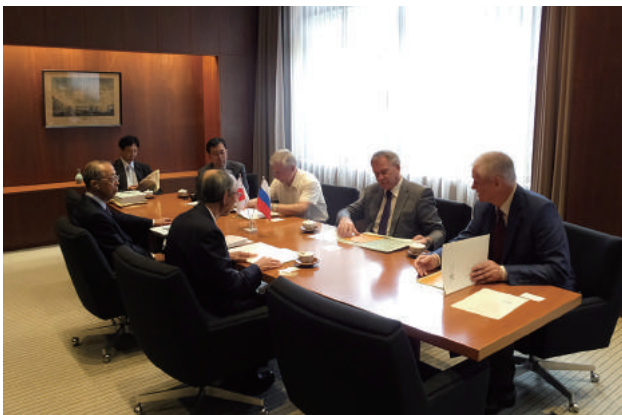
第 2 報告はロシア国立海軍文書館ワレンチン・スミルノフ館長でした。館長は今回初参加で、ロシア海軍水路部海図局長もつとめた海図の専門家です。報告は「1880 年代ロシア海軍水路測量家たちによる日本沿岸海図の出版—海軍文書館史料より—」と題し、日本沿岸の海図がロシア海軍によって複製刊行される過程が丹念に紹介されました。

第 3 報告は、ロシア国立歴史文書館セルゲイ・チェルニャフスキー館長による「1916 年閑院宮載仁親王のロシア訪問—来露 100 年を記念して—」。ロシア革命の直前にサンクトペテルブルクを訪問した閑院宮を歓迎する様子が儀典局の史料などから復元され、さらに 100 年前の貴重なフィルム映像が紹介されました。

ロシア史料にもとづく 3 報告に対し、活発な議論も行われ、意義深い研究集会となりました。最後にプロジェクト責任者の保谷 徹教授から、ロシアの両文書館から今回も 1000 コマほどのデジタル撮影データを受理し、日本や東アジアに関係する帝政ロシア政府史料の調査と目録刊行事業が進展していることが報告されました。

研究集会に先立ち、3 人の招へい者は、日本学士院を訪問し、塩野 宏幹事・斯波義信会員と懇談する機会を得ました。また、研究集会の翌日から報告者らは京都へ出張し、京都御所や旧閑院宮邸、日露戦争の捕虜収容所となった東福寺、京都ハリストス教会など、日露の歴史にかかわる場所を見学しました。

（文・保谷 徹東京大学史料編纂所教授）



日本学士院を表敬訪問したチェルニャフスキー歴史文書館長、スミルノフ海軍文書館長、クリモフ上級研究員



日露関係史料をめぐる国際研究集会

『学問の山なみ』から ―歴史をつくった会員―

130 年を超える学士院の歴史の中で、500 名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回 2 名を紹介します。

小野塚喜平次 おのづか きへいじ

明治 3 (1871) 年―昭和 19 (1944) 年

大正 6 (1917) 年帝国学士院会員選定



新潟県長岡生まれ。明治 28 (1895) 年帝国大学法科大学政治学科を卒業。明治 30 (1897) 年、ドイツ・フランスへの留学を命ぜられ、4 年後帰国。教授となり、政治学講座を担当した。昭和 3 (1928) 年には、東京帝国大学総長に選ばれ、昭和 9 (1934) 年に退官するまで務めた。

帝国学士院では昭和 10 (1935) 年から 8 年間第一部部長を務めた他、大正 14 (1925) 年には貴族院帝国学士院会員議員に選ばれ、3 期 18 年務めた。

小野塚は東京帝国大学における政治学の最初の専任教授であり、わが国における科学的政治学の創始者である。その目標は日本における立憲政治の確立にあり、その理論を組織するための政治学の建設であった。そのために採用したのは思索的また哲学的方法ではなく、あくまでも経験事実に基づいてこれより推理するという方法で

あった。小野塚は自らヨーロッパ諸国における立憲政治の発達の跡を尋ね、これを参照比較して日本の健全なる憲政議会制度の発達に資するに努めた。このことは、著書『政治学大綱』(明治 36 (1903) 年)、『欧洲現代立憲政治一斑』(明治 41 (1908) 年)、『現代欧洲之憲政』(大正 2 (1913) 年)、『欧州現代政治及び学説論集』(大正 5 (1916) 年)、『現代政治の諸研究』(大正 15 (1926) 年)等に認められる。

大学教授として吉野作造、南原 繁、蠟山政道ら後進を数多く養成したのみならず、大学行政にも多くの努力を傾けたが、特筆すべきは東京帝国大学総長在職中の事蹟である。在任中には関東大震災後の復興事業の完成、多年の懸案であった農学部移転問題の解決、総合大学の実現、大学研究機関の拡充改善、学生厚生施設の増進や帝国大学史の編纂刊行などを成し遂げたが、むしろ重要なのは、この期間内に発生した思想問題の紛糾に処して、よく研究の自由と大学の自主とを維持し得たことにある。すなわち、左傾及び右傾の学生からそれぞれ批難されたものの、その間に立って厳正中立の態度を堅持し、過激急進に走るのを戒めると同時に、みだりにこれを圧迫することなく、双方共に研究的精神を失わないようにこれを指導し、もって官憲の干渉と世間俗論の介入とを斥けたからである。

蠟山政道 ろうやま まさみち

明治 28 (1895) 年―昭和 55 (1980) 年

昭和 43 (1968) 年日本学士院会員選定



群馬県生まれ。大正 9 (1920) 年に東京帝国大学法学部政治学科を卒業後、小野塚喜平次の下で助手となり、大正 11 (1922) 年東京帝国大学助教授、昭和 3 年同大学教授に任ぜられ、政治学講座の初代担当者となった。昭和 14 (1939) 年に、いわゆる

肅学事件に際し、東大を退官。昭和 17 (1942) 年には衆議院議員に当選し、現実の政治にも関与した。敗戦と同時に、立法府議員としての戦争責任を深く感じて自発的に議員の職を辞し、ふたたび研究及び教育に尽くした。昭和 29 (1954) 年にはお茶の水女子大学学長に推され、女子高等教育を押し進めた。さらに昭和 37 (1962) 年には、国際基督教大学の社会科学研究所長となり、アメリカ式の行政学院を日本に根付かせることに力を注いだ。その他、自らの行政学理論を実践に移すために、戦後、各種の政府及び自治体の審議会委員を兼務した。

学問上の貢献は、政治学原論、行政学、地方行政論、比較政治学などきわめて広汎な領域に及んでいるが、重要なのは政治学及び行政学の原論における先駆的業績であった。特に後者において、蠟山は近代行政学体系の創設者といっても過言ではない。『行政学原論』(昭和 11 (1936) 年)において、行政の概念構成を、統治・生活営為・職務という基本的要素の三位一体としてとらえ、それによって行政における権力的契機と管理＝経営的契機との接合を試みたのであった。これは系譜的には欧米の政策学・都市行政学さらにいわゆる科学的人事行政の探究など、さまざまな動向から汲みながら、あくまで蠟山独自の構想に基づく体系化であった。

蠟山の学問に対する考え方は、社会的政治的現実峻厳に対立してこれに裁くところの理念を掲げる、という方向よりは、むしろあくまでも与えられた歴史的現実的諸条件に即し、その条件のなかで少しでも現実をより望ましい方向に導く方途を摸索することにあった。いわゆる純粋な象牙の塔の住人たることと、学問と言論をもって現実政治に働きかけることと、この両者の中間を歩む行き方を、蠟山は吉野作造から学んだと語ったと、丸山眞男は記している。

第9回学びのススメシリーズ講演会のお知らせ

本講演会は、様々な分野で素晴らしい研究を重ねてきた日本学士院会員が、日本の将来の担い手となる子どもたちに知ることのおもしろさ、学ぶことの楽しさを知ってもらおう一助になればという思いから企画されました。

徳川吉宗に学ぶ—日本の宝を守った将軍

日本学士院会員、慶應義塾大学名誉教授 田代 かずい 和生



《開催日時》

平成 28 年 12 月 17 日（土） 午後 2 時 30 分～

《会 場》

日本学士院 （東京都台東区上野公園 7－3 2）

《対 象》

中学生・高校生・一般 （定員 150 名）

「享保の改革」で有名な第 8 代将軍徳川吉宗が、海外へ流出していた大切な日本の宝を守ったことはあまり知られていません。「鎖国」時代の国際関係は長崎だけでなく、とくに対馬を経由した朝鮮との貿易では、薬用人参の輸入の見返りに良質な銀貨を長年にわたって支払ってきました。そこで吉宗は、国民に安くこれを提供しようという夢の実現に向かって、誰も挑んだことのない朝鮮人参の人工栽培に取り組みます。数十年をかけた国家的プロジェクトのもと、幾多の失敗にも負けず成功に導いた吉宗には、ある「秘策」がありました。今回は、日朝関係史の舞台裏でくり広げられた朝鮮人参国産化政策のなかから、将軍吉宗の国民へ対するひとつの志を学ん

でいきたいと思います。

〈申込方法〉

日本学士院ホームページの専用フォームから、またはメール（kouenkai2@japan-acad.go.jp）、FAX（03-3822-2105）のいずれかの方法で必要事項を記入の上、お申込みください。

〈必要事項〉

メール・FAX の場合、「学びのススメ聴講希望」と明記の上、氏名（ふりがな）、住所、電話番号、メールアドレス、中学生／高校生／一般の別を記載

第 65 回公開講演会のお知らせ

第 65 回公開講演会を日本学士院において開催します。下記まで事前にお申込みください。（定員 150 名）

《講 演》

奥田昌道会員（京都大学名誉教授・鈴鹿国際大学名誉教授）

「責任能力のない高齢者による加害事故と家族の責任」

長尾 真会員（（公財）国際高等研究所所長・京都大学名誉教授）

「電子図書館とその将来」

《開催日時》

平成 28 年 10 月 22 日（土） 午後 2 時～5 時 10 分

《会 場》

日本学士院 （東京都台東区上野公園 7－3 2）



奥田昌道会員



長尾 真会員

〈申込方法〉

日本学士院ホームページの専用フォームから、またはメール（kouenkai@japan-acad.go.jp）、FAX（03-3822-2105）、往復はがきのいずれかの方法で必要事項を記入の上、お申込みください。

〈必要事項〉

メール・FAX の場合、「公開講演会聴講希望」と明記の上、氏名（ふりがな）、住所、電話番号等連絡先を記載

会員・客員の逝去

次の方々が逝去されました。

Roland Mortier 客員 (ベルギー・比較文学専攻)

平成 27 年 3 月 31 日 享年 94 歳

藺田 坦 会員

(第 1 分科・西洋近世哲学史・宗教哲学専攻)

平成 28 年 4 月 22 日 享年 79 歳

柴田承二 会員 (第 7 分科・天然物化学・生薬学専攻)

平成 28 年 7 月 12 日 享年 100 歳

会員の近刊紹介

- ・荒井 献『使徒行伝<下巻>18章23節－28章31節(現代新約注解全書)』新教出版社、平成 28 年 4 月
- ・荒井 献『人が神にならないために 荒井献説教集』新教出版社、平成 28 年 4 月
- ・久保田 淳『鏡花水月抄』翰林書房、平成 28 年 7 月
- ・パスカル著、塩川徹也訳『パンセ(下)』岩波文庫、平成 28 年 7 月
- ・田代和生「『通信使記録』からみた使節団の庶民芸能見物」松田隆美編『旅の書物／旅する書物』所収、慶應義塾大学出版会、平成 28 年 9 月
- ・中野貞一郎『民事訴訟・執行法の世界』信山社、平成 28 年 7 月
- ・三谷太一郎『戦後民主主義をどう生きるか』東京大学出版会、平成 28 年 9 月
- ・酒巻俊雄、龍田 節(編集代表)『逐条解説会社法 第 9 巻 外国会社・雑則・罰則』中央経済社、平成 28 年 3 月
- ・藤田宙靖『裁判と法律学 「最高裁回想録」補遺』有斐閣、平成 28 年 7 月
- ・江頭憲治郎『合同会社のモデル定款 一利用目的別 8 類型一』商事法務、平成 28 年 5 月
- ・藤田昌久(編)『日本経済の持続的成長 エビデンスに基づく政策提言』東京大学出版会、平成 28 年 4 月
- ・大村 智『人をつくる言葉』毎日新聞出版、平成 28 年 5 月
- ・大村 智『自然が答えを持っている』潮出版社、平成 28 年 7 月
- ・大村 智『人間の句』毎日新聞出版、平成 28 年 7 月
- ・益川敏英『僕はこうして科学者になった 益川敏英自伝』文藝春秋、平成 28 年 7 月
- ・佐藤勝彦(作)、長崎訓子(絵)『絵本 眠れなくなる宇宙のはなし』講談社、平成 28 年 7 月
- ・須田立雄他(編著)『新 骨の科学 第 2 版』医歯薬出版、平成 28 年 5 月
- ・山中伸弥『山中伸弥先生に、人生と iPS 細胞について

聞いてみた』講談社+α文庫、講談社、平成 28 年 5 月
・京都大学 iPS 細胞研究所(著)、山中伸弥(監修)『iPS 細胞が医療をここまで変える』PHP 新書、PHP 研究所、平成 28 年 7 月
・伊藤穰一・山中伸弥『「プレゼン」力 ～未来を変える「伝える」技術～』講談社、平成 28 年 9 月

編集後記

今回のニュースレターでは、日本学士院第 106 回授賞式のほか、公開講演会、日韓学術フォーラムについての報告と受賞者からの寄稿並びに会員寄稿などを掲載しています。ご寄稿いただきました先生方には心より御礼申し上げます。

さて、今年の夏のリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックは前回ロンドン大会を上回る日本人選手の活躍などで盛り上がった大会でした。日本学士院のある上野公園では大会期間中「東京 2020 ライブサイト in 2016」というイベントが開催され、私も昼休みを利用して何度か行ってみました。パブリックビューイング、応援ステージ、体感型映像シアター、車いすバスケットボールの競技体験などのプログラムがあり、多くの方々がオリンピック・パラリンピックの雰囲気を楽しまれているようでした。このイベントのサブタイトルは「リオから東京へ」となっていますが、上野公園でも東京大会に向けて J R 上野駅公園口周辺の整備が進められようとしています。具体には公園口改札から上野動物園までをほぼ一直線で通行できるように 2020 年 7 月の完成を目指す計画となっています。この整備によって上野公園へのアクセスがより安全・安心で快適になることを期待しています。

日本学士院では来る 12 月 17 日(土)の午後、中学生・高校生を主な対象とした「学びのスズメシリーズ講演会」を開催する予定(P.11 にお知らせ)ですので、読者の皆様からもお知り合いの中学生・高校生にご案内いただければ幸甚に存じます。(H)

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32

電話：(03)3822-2101

FAX：(03)3822-2105

E-mail：jimu@japan-acad.go.jp

第 18 号：発行日：平成 28 年 10 月 11 日

(年 2 回 4 月、10 月発行)

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>